

「ローカルアジェンダ 21」を支援するためのワークショップについて

Workshop to support The Local Agenda 21

○古守 将也* 笹谷 康之**
Masaya KOMORI Yasuyuki SASATANI

ABSTRACT: In Kyoto city, citizens, business, and city government have been aiming at creating the partnership. Continual workshop had been held to push the Local Agenda 21 of which they participate in making in Kyoto city.

I gathered information by questionnaire to understand participants' the realities of environmental action and ideas in this continual workshop and agreed on the problems with the results of the workshop. Then I scored their environmental action and studied their conscious according to the score stage. Finally I proposed the course of this workshop.

KEYWORDS: Workshop, The Local Agenda 21, Partnerships, Public Participation

1 目的

京都市では、市民、事業者及び行政が、環境にやさしいライフスタイルや事業活動またパートナーシップづくりを目指して、「京のアジェンダ 21」の策定に参画し、この計画を推進するために連続ワークショップを開催してきた。^{1) 2)}

このワークショップでは、様々な立場の人々が交流し、お互いに意見を述べ合い、合意形成をしながら、問題を解決していくことを目指した。また次年度からの京のアジェンダ 21 の実施のためのワークショップに対して、プレワークショップと位置づけられる。本研究は、この「京のアジェンダ 21 連続ワークショップ」を事例に、ローカルアジェンダ 21 を実施していくためのワークショップのプログラム、参加形態及び市民参加を推進するためのプロセスのデザインを提案することを目的とする。

2 研究の方法

2.1 研究のフロー

ワークショップ実施の際に参加者の意識、環境行動の実態を把握するためにアンケートを行い、ワークショップの結果と比較しつつ、課題をまとめた。そして、環境行動の得点段階に応じた参加者の参加意識を考察して、ワークショップの今後の方向性を提案する。

* 立命館大学大学院理工学研究科 Graduate School of Science and Engineering Ritsumeikan Univ.

** 立命館大学理工学部 College Science and Engineering Ritsumeikan Univ.

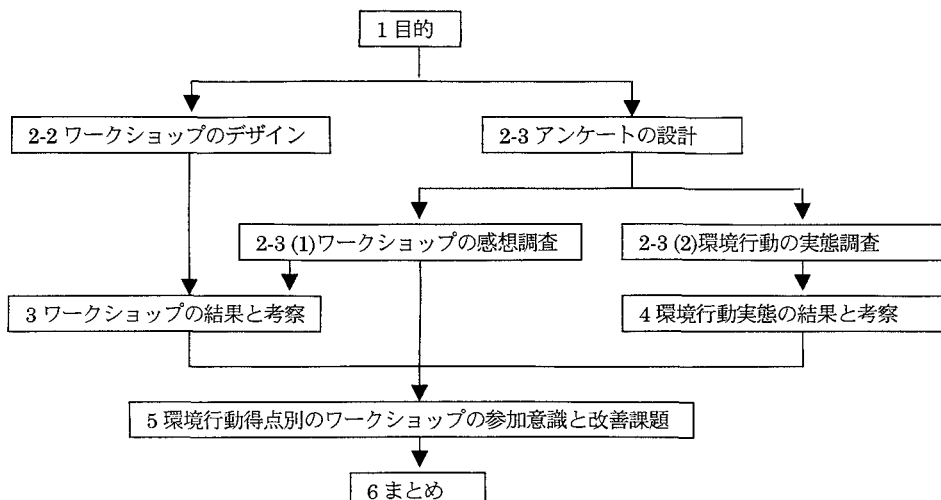


図1 研究のフロー

2.2 ワークショップのデザイン

ワークショップは、1997年9月～11月にわたり計4回行われた。次ページの表1に示すように、1回目は京都市の環境側面全般、2回目は企業セクターを主な対象とした生業と環境、3回目は地区単位の環境側面、4回目は取り扱いやすいテーマとしてグリーンコンシューマーを取り上げた。

(1) 第1回～第3回のグループKJ法

1～3回のワークショップでは、最初に自己紹介などをしながら参加者の気持ちをリラックスさせる等のアイスブレイキングを通じて班編成（1班6～8人）を行った。班内で与えられたテーマについてブレインストーミングを行い、各自が考える良い環境、悪い環境、不足する環境を一枚一項目でラベルに書き、模造紙に貼付け、ラベルを分類・整理するグループKJ法を行った。また、これらの課題に対する対策についても同様のグループKJ法を行った。各班ごとに成果となるKJ図解の発表を行い、全員でビジョンを共有した。これを重要性という観点から、シールを用いて図解上に投票して、参加者全員で評価した。

(2) 第4回の買い物ゲーム

グリーン購入の学習・体験を目的に「買い物ゲーム」を行った。電池、洗剤、食品ラップフィルム、ノート、紅茶、電球の各アイテムについて並べられた複数の商品を比較し、各自に最も環境負荷が小さいと考えられる商品を選ばせた。次にグループ内で、どの商品がもっとも環境負荷が小さいかについて議論し、グループで各アイテムごとに一商品を選ばせた。そして、グループごとに商品を選んだ理由を発表し合った。この成果を踏まえ、主催者が各商品の解説を詳しく行った。対象が明確だったこともあり、商品の環境側面に対する参加者の理解が深まった。

(3) 参加者の属性

全4回の連続ワークショップの参加者属性は図2のとおりである。特に主婦の参加が多く、声がかかるとまわりの人間に広めて参加を促進させるという主婦の傾向が、この結果につながったと思われる。逆に、一般市民・会社員の参加が少ない。これは、ワークショップ実施の広報不足と、時間の設定、ワークショップの内容に原因があると思われる。

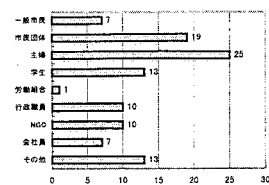


図2 参加者の属性

表1 ワークショップの概要

項目	WS	第1回 (全市版)	第2回 (事業者向け)	第3回 (地区版)	第4回 (全市版)
テーマ		京都の環境全般	京都のまちの生業と環境	京都の洛西地区の環境	グリーンコンシューマーとは何か
日時		H9.9.28(日) PM1:30~PM4:30	H9.10.28(火) PM1:30~PM4:30	H9.11.8(土) PM1:30~PM4:30	H9.11.16(日) PM1:30~PM4:30
一般参加者数		26名	20名	53名	8名
参加対象		京都市民	京都市民	京都市洛西地区の住民	京都市民
参加者の属性		環境 NGO メンバーが多く、それに一般市民が加わる	事業者が多く、環境 NGO メンバー、一般市民、行政担当者が加わる	地区住民が多く行政担当者が加わる	参加者自体少なかったが学生、一般市民、行政担当者が構成される
方法		グループ KJ 法	グループ KJ 法	グループ KJ 法	買い物ゲーム
内容		京都の環境をよくするための対策を KJ 図解にまとめる	事業者が加わってできる CO2 削減策を KJ 図解にまとめる	洛西の環境をよくするための対策を KJ 図解にまとめる	買い物ゲームを通じて環境に良い商品を学習する
効果		グループコーディネータの確保が十分だった	考える時間にゆとりが持てた	対象地区が狭いので環境側面に具体性があった	実感しやすい体験型であった
問題点		広報不足 目的の曖昧さ 趣旨説明が不十分	一般市民が参加しにくい 平日昼の開催 趣旨説明が不十分 広報不足	グループコーディネータのグループ作業のファシリテート能力の不足	広報不足 この内容をどう活かすかの説明不足 時間が不足した
課題		企業人がいなかった テーマが広すぎて内容が漠然としていた	企業の具体的な環境活動報告の場も必要である	若い世代が少なく参加者層が偏る	学習会的でこの内容を次にどうつなげていくのか説明がなかった

* 一般参加者以外にグループコーディネータ、ファシリテータ等の主催者もワークショップに参加している。よって、アンケートの有効回答数は、一般参加者数と一致しない。

2.3 アンケートの設計

(1) ワークショップの感想の調査票

参加者の意見や考え方を知り、次のワークショップに活かすために、図3のワークショップの感想の調査票では、参加対象、参加動機、ワークショップの感想を調査した。

(2) 環境行動の調査票

参加者の環境行動の実態を調査するために、図4の環境行動の調査票は、山田の環境チェック項目³⁾の中から日常生活の中での環境側面を全般的に考慮して、偏りのないように調査項目を選択して作成した。

アンケート
■ 参加対象
1 一般市民 2 市民団体 3 主婦 4 学生 5 労働組合 6 行政職員 7 NGO 8 会社員 9 その他 ()
■ 参加動機
「」でよろしいですから記入をお願いします。 このワークショップに参加して
■ うれしかったこと
■ 驚いたこと
■ 気づいたこと
■ がっかりしたこと
■ 学んだこと
■ 自分にとって必要だと思ったこと
■ その他に、考えたこと、書いておきたいこと

図3 ワークショップの感想の調査票

環境チェックリスト
○ (よくできている、よく認識している) 10点
△ (時々できている、普通に認識している) 5点
× (できていない、認識していない) 0点
を付け、合計点をだしてください。
A1 不在時は電気・ガス器具のスイッチなどをこまめに消す。()
A2 冷暖房は適温にコントロールする。(冬: 20℃、夏: 28℃前後) ()
A3 自家用車にはできるだけ乗らず、電車、バス、自転車を利用する。()
A4 洗濯には石鹸を適量利用し、合成洗剤は使わない。()
A5 過剰包装の商品は買わない。()
A6 不要品は買わないように、計画的に物を買う。()
A7 食品は賞味期限内に食べるようにして、無駄に捨てない、食べ残さない。()
A8 使用済みの紙を、計算用紙、封筒、袋などにして使う。()
A9 鉄、アルミ、ビンなどの容器は資源ゴミなので分別して資源化ルートに出す。()
A10 エコマーク、グリーンマークなどエコラベル商品を選んで買う。()

図4 環境行動の調査票

引用文献2) より作成

3 ワークショップの結果と考察

3.1 グループ KJ 法から明らかになった環境側面

3 回のワークショップ中で話し合われた環境対策側面を成果品と KJ 図解をもとに、意見の多さや問題の現況・取り扱いやすさから整理すると、図 5 のような結果になった。「交通」「ゴミ減らし」「教育」等の側面は 3 回とも共通しており、他の側面よりも早急に対策を講じる必要があると考えられる。

全市版のワークショップでは、京都市全域をイメージした「観光」「景観」「文化」といった環境側面が、事業者向けワークショップでは京のアジェンダ 21 検討委員会で重要議題とされた CO2 の排出削減といった課題を素直に踏まえた環境側面が、地区版ワークショップでは、洛西地区の実態と壮年層のコミュニティ活動の成果を踏まえた環境側面が、取り上げられた。

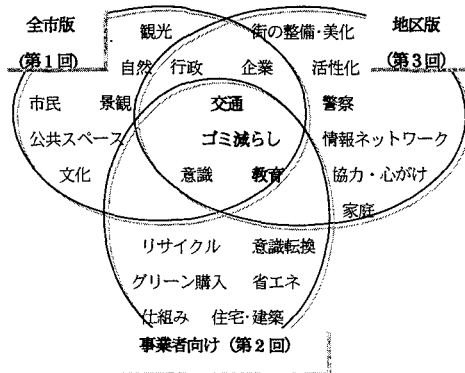


図 5 グループ KJ 法で強調された環境側面

3.2 ワークショップの感想の調査結果

「学び」「気づき」の項目に意見が多かったので、ワークショップは全体的に成功したと考えられる。参加者自ら「学び・気づき」と実感し、最終的には「自分自身に必要なこと」として受け止め、行動していくような一連の流れをつくっていく必要がある。

「喜び」「驚き」「がっかり」の項目は、改善点として、次のワークショップにつなげていくべき点である。また、項目に関係なく、本ワークショップの課題を指摘する声も多かった。特に目立った意見を参考に、明確になったことをまとめると以下の通りである。

- ①ワークショップの結果は必ず参加者にフィードバックするとともに、ワークショップの成果を「京のアジェンダ 21」でどのように活用するかについて明示する必要がある。
- ②意識の格差がある参加者に対するワークショップの円滑な運営が求められる。
- ③ワークショップとして時間的にはかなり確保されていたが、それでも意見交換や自分の思っている事を話せる場が足りない。
- ④参加者の質問・疑問に対して、行政や専門家が答える機会を設けるべきである。
- ⑤グループコーディネータの養成が求められる。

4 環境行動の実態

4.1 ワークショップの参加の動機

図 6 の参加の動機の「意欲」は、「興味・関心」「認識・情報収集」「取り組みの勉強」を含む。「興味・関心」は、興味はあっても、まだ明確な目的を持っていない層である。「認識・情報収集」は、何らかの目的を持って参加している層である。「取り組みの勉強」は、身近にできる環境行動を学び、実行しようとする明確な目的を持っている層である。結果として、幅広い広報の重要性と、意欲的な参加者のやる気をうまく

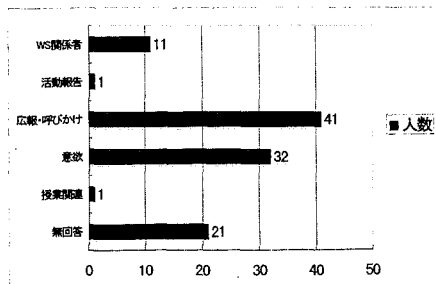


図 6 ワークショップの参加の動機

持続させる必要性が確認できた。明確な目的を持って参加している人はまだまだ少なく、「参加者が何をするべきか、何を学ぶべきか」といった目的が明確で、内容も参加者の取り組みやすいもの、身近なものにする必要がある。

4.2 各質問項目に見る環境行動

図4の環境行動を図7に項目別に集計した。項目のキーワードも図7に示す。

達成率の低いA4、A10では、商品に関する知識が不足していると考えられる。買い物という観点からA5とA6を比較すると、A5の方が達成率は悪い。これはA5は購買者に働きかける行為を含んでおり、A6は自分だけでできるからだと考察できる。

達成率の良いA1、A2、A9は、自分自身で実践できる身近な行動である。つまり、「地球環境のために何かやりたいが何をやって良いかわからない」という人には、最も取りかかりやすい行動であると言える。

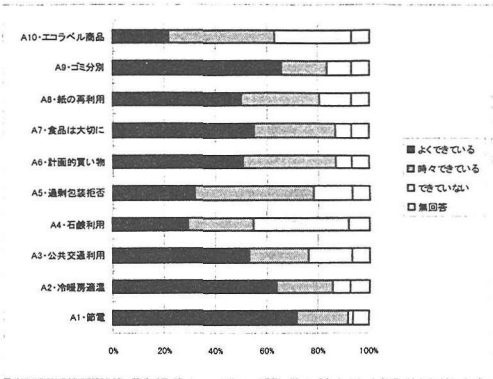


図7 環境行動の集計結果

4.3 参加者の環境行動の総合評価

(1) 合計得点の分布

図8から言えることは、最頻値は70点で、得点分布は60~80点に集まっている。この結果より、環境汚染・資源浪費型のライフスタイルの人は極めて少なく、このワークショップへの参加者は、環境配慮型のライフスタイルを実現している人が多いと考えられる。

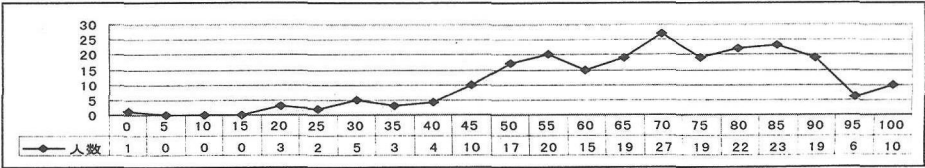


図8 参加者の環境行動得点のヒストグラム

(2) 属性別の平均と標準偏差

図9から、主婦の平均が最も良い79点だった。主婦向けの質問が多いこともあるが、参加した主婦は環境についてよく認識し、環境配慮型のライフスタイルを実現できていると言えよう。逆に学生・会社員は全体平均を下回り60点であった。また、標準偏差値の大きい割合を示した市民団体、学生は、得点の分散が大きい。特に平均点の最も低かった学生は、普段から環境に高い意識を持って行動している層と、環境認識・配慮が欠けている層とに分かれている。逆に、標準偏差値の低い会社員、主婦、一

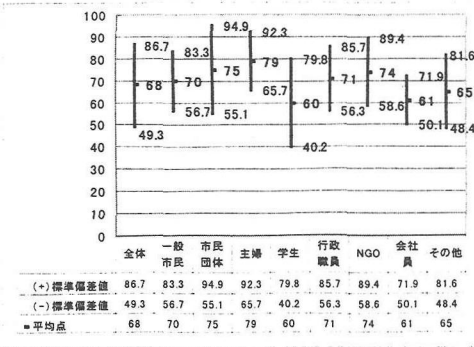


図9 参加者属性別の平均点と標準偏差

般市民は、合計点のばらつきが他の参加者属性に比べて小さい。学生に次いで平均点が低かった会社員は、おおむね低得点で環境に高い意識をもって取り組んでいる人が少ないと考えられる。平均点の最も高かった主婦に関しては、大部分の人が高得点集中していた。

5 環境行動得点者別のワークショップの参加意識と改善課題

参加者を得点別に三段階の階層に分けて、参加意識をクロス集計し、得点者間で共通する意見、得点者間で対立する意見、ワークショップの課題を抽出し、表 2 にまとめた。

表 2 環境行動得点別の主要な意見

	低得点者層（0～55 点）	中得点者層（60～75 点）	高得点者層（80～100 点）
喜び	○コミュニケーションの重要性を感じた	○コミュニケーションの重要性を感じた △日常的な活動の報告ができた	○コミュニケーションの重要性を感じた
驚き		△環境についての現状認識の格差 △若い人の熱心さ	△日常的な活動の報告が聞けた △環境についての現状認識の格差
気づき	△環境についての現状認識の格差 △目新しい発想が少ない △若い人の熱心さ ×参加者の考え方の違い ×環境知識のない人は参加しにくい	△目新しい発想が少ない	×参加者と同じ思い ×発言しにくい人の存在
がっかり	×作業時間が短い	△参加者の意見をまとめることの難しさ ×作業時間のかかりすぎ	△参加者の意見をまとめることの難しさ
学び		○コミュニケーションの重要性を感じた	○コミュニケーションの重要性を感じた
自分自身に必要な事	○多くの人に環境の現状を伝え行動していく事 ○コミュニケーションの重要性を感じた	○多くの人に環境の現状を伝え行動していく事 ○コミュニケーションの重要性を感じた △一人一人の環境意識の向上	○多くの人に環境の現状を伝え行動していく事 ○コミュニケーションの重要性を感じた △一人一人の環境意識の向上 △若い人への教育
その他	△身近に取り組める環境行動を教授してもらうこと	△身近に取り組める環境行動を教授してもらうこと	

○：得点者間で共通する意見 ×：得点者間で対立する意見 △：ワークショップの課題

注：空白は意見がなかったわけではない。

(1) 得点者間で共通する意見

「様々な立場の人と同レベルで話し合えた」「いつも自分が考えていたことを皆で話し合えた」等のように、各階層で、コミュニケーションの重要性を感じて、喜び、学び、必要性を認識する意見が最も多かった。つまり、参加者一人一人が本音のつぶやきを表現しやすい雰囲気をつくっていくことが重要である。また「周りの人に、行動してもらえるように伝えること」等のように、各階層で、多くの人に環境の現状を伝え、行動していくことが必要であるという意見も多かった。よって、参加者の理解を深めるためにも、今後、より実感しやすい身近なテーマやプログラムを練っていくべきである。

(2) 得点者間で対立する意見

高得点者が低得点者に対して「発言しにくい人がいる」とみなした点と、低得点者が自分自身に対して「環境知識のない人は参加しにくい」とした点とは、事実を共有する気づきであった。「参加者と同じ思い」「参加者の考え方の違い」等のように高得点者層と低得点者層の間で対立する意見が見られた。また、「作業時間がかかりすぎ」「作業時間が短い」等のように中得点者層と低得点者層の間での対立する意見も見られた。これらの対立意見は、以下の課題を解決することによって、解消されと考えられる。

(3) ワークショップの改善課題

中得点者層と高得点者層は「個人レベルで多様な方策をとっている」等として、日常的な活動を発表し合う場に喜びや驚きを感じているので、このようなワークの時間を設定することは重要である。また、ワークショップでは、「一人一人の環境意識の向上」や「もっと勉強しなければ」等のように、参加者自身が環境問題の現状を認識することを必要としていた。「意外に環境の認識に差がある事」等のような環境についての現状認識の格差に関する驚きや気づきは、テーマの明確化とそのテーマに応じたワークショッププログラムの作成によって解決すると考えられる。具体的には、本当に議論すべきテーマを絞りこみ、参加者の属性、参加しやすい時間帯、ふさわしい分野の専門家の助言を考慮したプログラムを組むべきであろう。年配の人が「若い人が頑張っている」とする驚きと気づきをして、グループコーディネータをした若者が「参加者属性が多様でまとめきれなかった」とする落胆に対しては、環境問題に熱心な若者をグループコーディネータとして教育することが求められるであろう。「自分の持ち場でできる方策を提示して欲しい」「目新しい発想が少ない」等の意見に対しては、身近に取り組める環境行動の実例を一部で示せるようなプログラムを組み立てて、参加者から出た意見で欠けている環境側面や対策を専門家が補足的に示せる工夫も必要である。

6 まとめ

この4回のワークショップは、おおむね好評で有効な手段と参加者に受け止められた。来年度からの本格的なローカルアジェンダ 21 の実施を支援するワークショップ計画を進めていく上でのワークショップ成果のフィードバック、意識格差のある参加者の認識共有、効率的な時間配分のプログラム、不足する意識や難問への専門家の回答の必要性、グループコーディネータの育成という5つの課題を整理することができた。これらの課題を今後の京のアジェンダ 21 実施に活用することによって、本研究がローカルアジェンダ 21 の支援となることを願ってやまない。

文献

- 1) 笹谷康之・すぎ本育生・内藤正明、市民参加型ローカルアジェンダ 21 策定の試み 環境システム研究 Vol.25 PP711~719、1997
- 2) 京のアジェンダ 21 委員会・京都市、京のアジェンダ 21、1997
- 3) 山田国広、1 億人の環境家計簿、藤原書店、1996